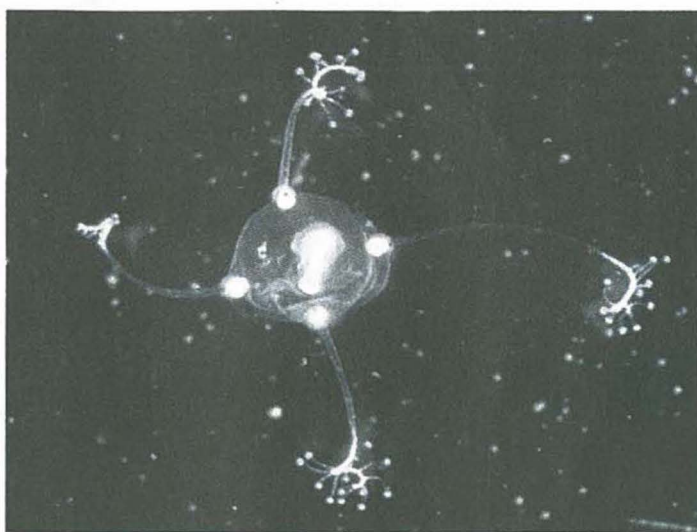


エダワカレサルシアクラゲ(新称)



△
謎の多いエダワ
カレサルシアク
ラゲ

田辺湾からは、夏から秋にかけてごく少数が採れる、この小さなヒドロクラゲは、世

久保田 信

41



界共通の名前である学名がまだ決定されていない。和名もついていない。日本で初めて、京都大学瀬戸臨海実験所の2008年の年報で、筆者がまとめた田辺湾産のヒドロクラゲ類のリスト中に登場させた。今回の連載でエダワカレサルシアクラゲと名付けた。この名前の由来は、4本の触手の先端に短い枝をたくさんつけているからで、本種の属名を和訳したものである。

このエダワカレサルシアクラゲをはじめ、日本で一番クラゲの分類が進んでいる田辺湾でも、正体はつきりしないクラゲはまだいる。

エダワカレサルシアクラゲの仲間は世界にたった2種しかない。しかし、それらと田辺湾産のクラゲは同じように、違うような感じで、形態がはつきりしない。このクラゲをプランクトンネットでひいて採っても、弱っている形態がよく確かめられないからだ。

画像の個体はほぼ成熟しているようだ。なぜなら、傘の中央にある口柄の周りをぐるりと取り囲む生殖巣が形成されているからだ。口柄の上半分が細い部分となっていないようだ。4本の触手のいずれも、枝分かれた部分が既知種よりも数多く備わっているように思われる。新種の可能性も高い。触手の根元の膨らみには外側に眼点が1個ずつある。これはこの仲間に通じた特徴で、光を感じることができるクラゲだ。

このクラゲのポリプはまだ世界からさっぱり知られていない。ひよっとしたら世界で初めて田辺湾で見つかるかもしれない。(京都大学准教授)